

かきく 風のすゝ所(かきくたり) 兼、初花、廿三「たひひにきるを給ら
かきくせ奉りて後」

かきくし 已に(かきくし)の所に附す「散木、中、五十四「同輪に女の髪
をかきくしこころをみる所き」かきくし人の袂の戀しをたづねたひかみ
をかきくしこころを」

かきくし 垣越 「散木、上、八「梅花風にかきくをよめる」かきくしに
吹くる風の匂ひにて花のありかきくをよめる哉「夫、十二、兼家」
と露の玉の滯るかきくしは雪かきくをよめる庭の面かきく 兼、十
一、十九「花は(かきく)かきくしにたづねて目あひ見しこころを千たひ
なげきし」同、廿二「人まもりおし(かきく)にたづねて子あひ見し(かきく)
に事よきたまき」

かきくし 新古今、雜中、俊成「(かきく)かきくしにたづねてそのおのの竹
かきくしをよめる世中ぞかきく」兼、花山、十一「大將殿も内々參れば
かきくしにたづねてかきくしをよめる給ひぬ」

かきくし 夫、四、源有仲「春霞(かきく)かきくしをよめる絶間(かきく)より浪し
て志賀の花山」

かきくし 夫、廿六「草枕涙(かきく)かきくしをよめる鴨の羽音に
兼、源のついで「(かきく)かきくし、十五「涙(かきく)かきくし神皇正統記「老のなみた
かきくしをよめる」

かきくし 播合「源、少女、十八「かきくしをよめるかきくしをよめるかきくしを
よめる給ひぬ」同、十九「秋風(かきく)かきくしをよめるかきくしをよめるかきくしを
よめる給ひぬ」

かきくし 書明「源、源、源、源、十五「かきくしをよめるかきくしをよめるかきくしを
よめる」

かきくし 源、源、源、源、十六「目及はは御書(かきく)かきくしをよめるかきくしを
よめる」

かきくし 源、源、源、源、十六「目及はは御書(かきく)かきくしをよめるかきくしを
よめる」

かきくし 源、源、源、源、十六「目及はは御書(かきく)かきくしをよめるかきくしを
よめる」

かきくし 源、源、源、源、十六「目及はは御書(かきく)かきくしをよめるかきくしを
よめる」

かきくし 源、源、源、源、十六「目及はは御書(かきく)かきくしをよめるかきくしを
よめる」

かきくし 源、源、源、源、十六「目及はは御書(かきく)かきくしをよめるかきくしを
よめる」

かきくし 源、源、源、源、十六「目及はは御書(かきく)かきくしをよめるかきくしを
よめる」

かきくし 源、源、源、源、十六「目及はは御書(かきく)かきくしをよめるかきくしを
よめる」

かきくし 同、十九「紅葉(かきく)かきくしをよめるかきくしをよめるかきくしを
よめる給ひぬ」

かきくし 同、若菜、下、廿二「(かきく)かきくしをよめるかきくしをよめるかきくしを
よめる給ひぬ」

かきくし 播合「源、源、源、源、廿三「和(かきく)かきくしをよめるかきくしを
よめる」

かきくし 徒然、九十段「又(かきく)かきくしをよめるかきくしをよめるかきくしを
よめる候は
云々)敬する貌なり(今物語)此修行者立ちかきくし袖をかきくしは
かきくしをよめる」

かきくし カキは助語に也「源、竹川、廿二「夜一よ所々に(かきく)か
きくしをよめる」

かきくし 書集「源、初、源、源、十一「(かきく)かきくしをよめるかきくしを
よめる」

かきくし 源、源、源、源、上、十「花故に風(かきく)かきくしをよめるかきくしを
よめる」

かきくし 源、源、源、源、上、十「命婦の君を御(かきく)かきくしをよめるかきくしを
よめる」

かきくし 源、源、源、源、上、十「命婦の君を御(かきく)かきくしをよめるかきくしを
よめる」

かきくし 源、源、源、源、上、十「命婦の君を御(かきく)かきくしをよめるかきくしを
よめる」

かきくし 源、源、源、源、上、十「命婦の君を御(かきく)かきくしをよめるかきくしを
よめる」

かきくし 源、源、源、源、上、十「命婦の君を御(かきく)かきくしをよめるかきくしを
よめる」

かきくし 源、源、源、源、上、十「命婦の君を御(かきく)かきくしをよめるかきくしを
よめる」

かきくし 源、源、源、源、上、十「命婦の君を御(かきく)かきくしをよめるかきくしを
よめる」

かきくし 源、源、源、源、上、十「命婦の君を御(かきく)かきくしをよめるかきくしを
よめる」

かきくし 源、源、源、源、上、十「命婦の君を御(かきく)かきくしをよめるかきくしを
よめる」

御代よりさうしな。此橋をさすべくのかくの木實を名づけしとて

よほひ 一具、二具。契云、日本紀「耳矢二具」源、雄後「みづ

よほひ 鏡「長前平家、十四、十一」其勢わづかに九百よほひ

よほ 夜「後拾遺、少將井尼」「人しれおつるなみたの音をせばよ

よほかきつこほ 「桑石隆、十六」ひろき所に人すくはなほほゆるま

また世はかうこそはありければせはしきし、世の御ありまかたりつ

よほた 夜肌「六帖、五、上」ひでりねの夜はたの寒さこりそめて昔

よほら 四方「更科日記」大きな石のよほらなる中に穴のあきた

よほら 呼也「拾遺、仲算法師」「聲高くみかろの山をよほらなるあ

よほら 男女忍び相逢を云ふ「古事記、上、廿九」佐「發誓、用婆比

よほひ 男女の事はらふよほひの所に附す

よほひ 輪「源末裔、廿二」わりなの人はうらみひれ給と御よほひ

よほひ 御よほひの御よほひの御よほひの御よほひの御よほひ

よほひ 命ぞぞと思ひつれ「同、田石、廿七」もほほほほほほほほほほ

よほひのつかひ 「宇津保、藤原、上、二、三」天皇みこ宮殿のはらの

わが心も風の吹くはらばらに... 源吉、別天曆御製「旅するものさす...」

よも 時々のつらに同く度... 契沖云、十度さすよりさすより時... 源吉、別天曆御製「旅するものさす...」

よも 是も度の心なる... 鷹狩に三ツリ「夫、十八、法性寺入道關白」は... 源吉、別天曆御製「旅するものさす...」

よもは より羽也「夫、十、爲相」か... の袖ぬれすらし鶴のよりは... 源吉、別天曆御製「旅するものさす...」

よもは 源、養生、初「わが身のより所あるは一方の思ひこそ...」

よもは 源、養生、初「わが身のより所あるは一方の思ひこそ...」

よもは 源、養生、初「わが身のより所あるは一方の思ひこそ...」

よもは 源、養生、初「わが身のより所あるは一方の思ひこそ...」

よもは 源、養生、初「わが身のより所あるは一方の思ひこそ...」

よもは 源、養生、初「わが身のより所あるは一方の思ひこそ...」

ければ... 源吉、別天曆御製「旅するものさす...」

よもは 源、養生、初「わが身のより所あるは一方の思ひこそ...」

よもは 源、養生、初「わが身のより所あるは一方の思ひこそ...」

よもは 源、養生、初「わが身のより所あるは一方の思ひこそ...」

よもは 源、養生、初「わが身のより所あるは一方の思ひこそ...」

よもは 源、養生、初「わが身のより所あるは一方の思ひこそ...」

よもは 源、養生、初「わが身のより所あるは一方の思ひこそ...」

よもは 源、養生、初「わが身のより所あるは一方の思ひこそ...」

よもは 源、養生、初「わが身のより所あるは一方の思ひこそ...」

「後撰・雜・二冊大政大臣」今昔物語は花の物語にして...

「源・源朝臣」二二日の御座りて思ひの外...

「源・源朝臣」二二日の御座りて思ひの外...

「源・源朝臣」二二日の御座りて思ひの外...

「源・源朝臣」二二日の御座りて思ひの外...

「源・源朝臣」二二日の御座りて思ひの外...

「古・序」富士の烟はよみて人をこひ...

「源・源朝臣」二二日の御座りて思ひの外...

「源・源朝臣」二二日の御座りて思ひの外...

「源・源朝臣」二二日の御座りて思ひの外...

「源・源朝臣」二二日の御座りて思ひの外...

「源・源朝臣」二二日の御座りて思ひの外...

「源・源朝臣」二二日の御座りて思ひの外...

「出雲國道神賀吉詞」詔解、五十六十八「善事

たまた横波の給はてなかなたひな事なせは

「萬代、卷上、仲正」三輪の山ももめくろのよか

「源、藤原、三、高嶺、横、天」源、藤原、三、高嶺、横、天

たる木の木高、藤原、三、高嶺、横、天

北斗、星前、横、旅雁

「夫、廿九、信實」三丁、此云、與許奈摩盧

「神武紀、三丁、此云、與許奈摩盧

「夫、廿六、善家」あまたたてまつる

「夫、十九、永久四年百首、春曉、兼昌」山の端のよこ

「夫、廿二、六百、信實朝臣」わが懸はまた吹なれぬ

「源、手書、廿三」竹は月

「伊勢物語、六十三段」昔世心づける女いかに心な

「萬、九、廿一」かまほなす人の横辭しげきかも逢ぬ日

「夫、十九、信實朝臣」新六、村雨」窓うつも風

にしたがら横雨のおといたひかよりすななちらん

「同、十九、建保八年

「宇治拾、一、五」横座の鬼」同、むねある鬼よこ座にゐた

「同、十八、十二、五」横座の鬼」同、むねある鬼よこ座にゐた

「同、十八、十二、五」横座の鬼」同、むねある鬼よこ座にゐた

「同、十八、十二、五」横座の鬼」同、むねある鬼よこ座にゐた

「同、十八、十二、五」横座の鬼」同、むねある鬼よこ座にゐた

「同、十八、十二、五」横座の鬼」同、むねある鬼よこ座にゐた

「源、手書、廿三」竹は月

「夫、十九、永久四年百首、春曉、兼昌」山の端のよこ

「夫、廿二、六百、信實朝臣」わが懸はまた吹なれぬ

「源、手書、廿三」竹は月

「夫、十九、永久四年百首、春曉、兼昌」山の端のよこ

「夫、廿二、六百、信實朝臣」わが懸はまた吹なれぬ

「源、手書、廿三」竹は月

「夫、十九、永久四年百首、春曉、兼昌」山の端のよこ

「夫、廿二、六百、信實朝臣」わが懸はまた吹なれぬ

「源、手書、廿三」竹は月

「夫、十九、永久四年百首、春曉、兼昌」山の端のよこ

「夫、廿二、六百、信實朝臣」わが懸はまた吹なれぬ

增補雅言集覽卷之上終

明治三十六年十月廿三日印刷
明治三十六年十月廿六日發行



發行者 飯田永夫
東京市神田區北神保町十三番地

發行者 藤森佐五吉
東京市牛込區南町十八番地

印刷者 齋藤章達
東京市日本橋區兜町二番地

印刷所 東京印刷株式會社
東京市日本橋區兜町二番地

42E3

發行所

東京市牛込區南町十八番地

廣益圖書株式會社

發賣所

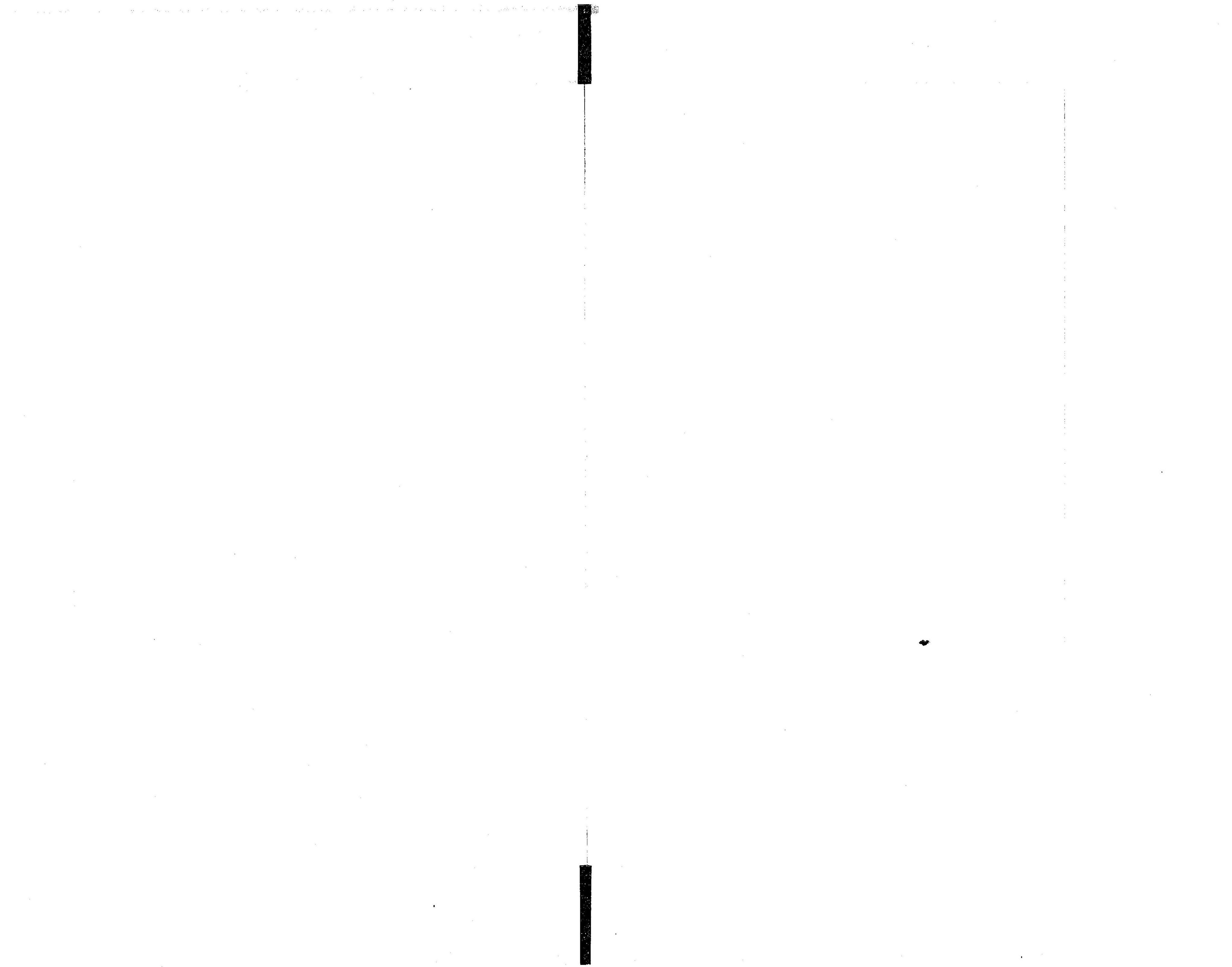
東京市神田區錦町一丁目十番地

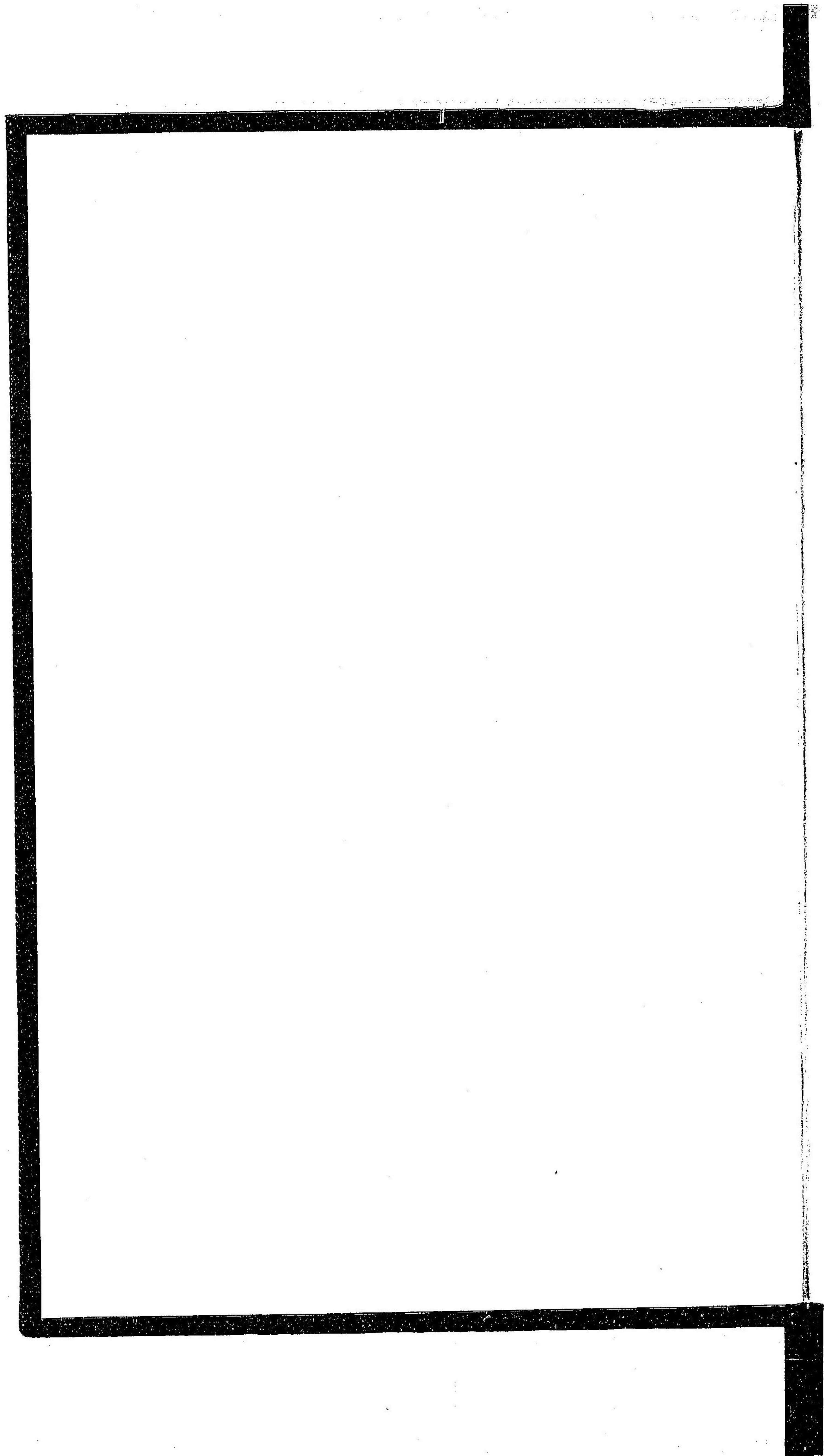
明治書院

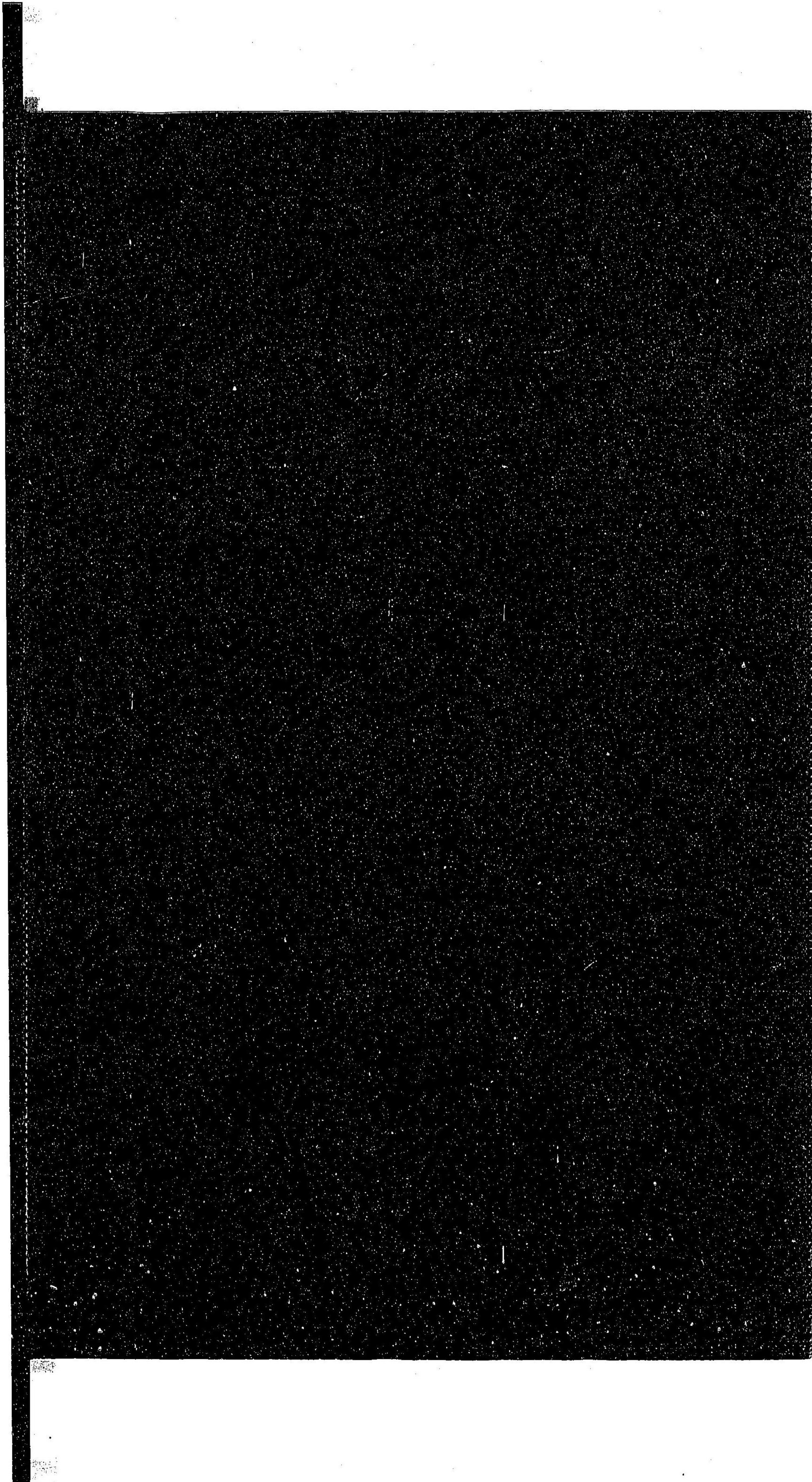
發賣所

東京市日本橋區通三丁目六番地

林平次郎







813.6
I619a
N

077432-001-4

813.6-I619gN

雅言集覽 (增補)

石川 雅望/編

上

M36-37

DAC-0718

